



Title	Interface humanities 06
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13191
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Interface Humanities

06

コミュニケーションの技・知

Contents

特集 コミュニケーションの技・知

- 3 インタビュー 媒介の知恵
稲葉一人 聞き手・構成 本間直樹
- 7 何を「横断」し、どう「臨床」するべきか
中岡成文
- 9 インターフェイスとメディアのデザイン
池田光穂×小林傳司
- 12 出来事のデザイン
久保田徹 清水良介 花村周寛 本間直樹
- 14 コミュニケーション支援技術について 西田正吾
- 16 「イメ日」ワークショップの実験報告
ーディスカッション・ペーパー、インスタレーション
伊藤 遊
- 18 「海城アジア史研究入門」にむけて
蓮田隆志 藤田加代子
- 20 オタクとコミュニケーション 井手口彰典
- ih.Topics
- 21 イベント・刊行物情報
Interface 人とネットワーク
- 22 「共生」という器に何を盛るのか
- 24 媒体／霊媒としての歴史記述 森 宣雄
- 25 エキゾチックでも、ユートピアでもなく 田沼幸子
- 現代を測る
- 26 韓日の歴史問題にみる対話の臨床性
李 吉鎔
- フィールドのざわめき
- 28 もめごとの参与観察
加藤敦典
- 人文学のフロンティア
- 30 グローバルヒストリーの探求
秋田 茂
- 32 編集後記

Feature: Art of Communication

- 3 Interview with Kazuto INABA: Wisdom of Mediation
Interviewer: Naoki HOMMA
- 7 What Is to Be "Traversed" and How Are We to Be "Clinical"?
Narifumi NAKAOKA
- 9 Designing "Interface" and Communication-Media
Mitsuho IKEDA / Tadashi KOBAYASHI
- 12 How to Do Things with "Design"?
Tetsu KUBOTA / Ryosuke SHIMIZU
Chikahiro HANAMURA / Naoki HOMMA
- 14 Technology for Communication Support
Shogo NISHIDA
- 16 Report on Workshops by IMENICHI: *Discussion Papers, Installation*
Yu ITO
- 18 Crossing the Divide: *Introduction to the Study of Asian Maritime History, 9th-19th Centuries*
Takashi HASUDA / Kayoko FUJITA
- 20 OTAKU and Their Communications
Akinori IDEGUCHI
- 21 Interface Humanities Topics
- 22 How Can We Live Harmoniously with People Having Different Linguistic and Cultural Backgrounds?
- 24 Historiography as a Medium: Yoshio MORI
- 25 Anthropology in Cuba: Neither Exotic nor Utopic: Sachiko TANUMA
- 26 The Lack of Dialogue on the Historical Conflicts between Korea and Japan
LEE Kilyong
- 28 Participant Observation of Disputes
Atsufumi KATO
- 30 In Search of Global History
Shigeru AKITA
- 32 Editorial Note

Interface Humanities

「一方通行」ではなく「双方向」のコミュニケーションが重要であるという認識が多方面で広がりつつある。しかし、本来コミュニケーションにとっては知識伝達の量や情報の流れの方向だけが問題なのではない。コミュニケーションは、その参加者や情報の他に、それが成り立つ場やコンテキスト、人びとの関係性、情報メディアなど、さまざまな媒介者・媒介物なしには成立しない。

特集 コミュニケーションの技・知

人と人のあいだで対話を成立させる、ある出来事をしかける、出来事を記録して別の場所に伝える、参加・調査して発表する、発表や議論の媒体を作る、表情から文字までさまざまなコミュニケーション支援メディアを考案する、新しいコミュニケーションスタイルを身につける、こうした媒介の技は一つの知でありアートである。先進的なコミュニケーションのテクノロジーの手前で、あるいはその後も、欠くことのできないこうしたコミュニケーションの技・知（アート）について、COE プログラムとコミュニケーションデザイン・センターの共同で特集する。

媒介の知恵

聴き手・構成 本間直樹

臨床と対話



私は裁判外紛争解決（ADR）という枠組みのなかで、ミ（メ）ディエーション（mediation）（※１）という対話による紛争解決の試みを行ってきました。NPO活動などを通して、私自身は法律家として対話の

基本について考えてきましたが、四、五年前、大阪大学の臨床哲学研究室が対話の哲学的な基礎に非常に重点をおかれていることを知りまし

た。そこからある種必然的な繋がりが生まれ、その後「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」（※２）、そしてCOEプログラム「インターフェイスの人文学」が走り出し、私は双方に関わらせていただきました。そうしたなかで、双方のプロジェクトに支えられて「対話シンポジウム」

（※３）を企画・開催しました。対話というものが社会のさまざまな人たちとかかわりがあるならば、やはり法律家にも入っていただきたい、ただ、法律家といっても弁護士のように裁判・法律に関する専門的な対話をする人たちだけではなく、準法律家といわれる、どちらかというと市民に近いような人を巻き込んだ対話ができるようにしたいと考えました。また、シンポジウムには渥美先生や中岡先生にも出ていただき、法律とは別のところで対話をされている人たちと法律という領域内での対話をしてきた人たちとのあいだでどのように対話ができるのか

ということも目論みの一つでした。また、このシンポがロースクールではなくて、文学研究科という法律系以外のところで開かれたということも意味のあることだと思います。さらに三回目にはアメリカのペパーダイン研究所からミディエーションのトレーナーを招き、ミディエーションのトレーニングの実際に参加者に体験していただきました。この三回の対話シンポジウムが社会に与えた影響というのは、すぐには見えないかもしれませんが、非常に大きいと思います。

科学と社会の対話

もう一つ、私はCOE開講科目「科学と社会」の一つ、「科学技術と倫理」（※４）のコーディネータを務めています。「科学技術と倫理」というテーマは今どこそ流行りの言葉になりましたが、三年前はそうでもなく、むしろ日本でも初めての試みでした。「科学技術と社会の対話」というテーマについては、実はまだ一人の人間がすべて答えを出すことができません。そこで私は各分野において社会との関係を常に意識して研究されている先生方をお招きし、それぞれ現状での最もレベルの高いものをしつかり出していきたいと各先生にお願いしました。その結果ほとんどオールジャパンに近い非常にレベルの高い内容になり、一回一回がそれぞれ講演会にしてもいい内容が年間二〇数回並ぶことになりました（６頁資料参照）。とくに一年目は、理想型としての調和を最

初からコーディネートするのではなく、むしろ違った意見が出てきて不協和音になるようにと考えました。

この授業の狙いは、科学技術と社会とが対話を通して相互に刺激を与え合いながら動いていく様を考えることです。つまり、科学技術ができあがったものとして社会が受容することだけではなく、科学技術が作られていく過程において、社会との対話が不可欠だというが視点をもっています。例えば、薬を作る時にも治験者という市民を巻き込み、そこでの市民との対話が欠かせないし、また薬ができた後に社会の人たちとそのベネフィットとリスクをどのように共有していくか、という対話も必要です。それに、科学技術は今のような臨牀的・医学的なものもありますし、工学的なものも理学的なものもさまざまにあるわけですが、あまり一つに固執せず、いろんな分野を対象にしたというのも特徴です。そしてさらにこの二、三年目は対話の具体的な進め方、とくに京都大学の加藤和人先生やNPO法人サイエンスコミュニケーションの方々がされている、具体的な科学技術と社会の対話の進め方もプログラムのなかに取り入れました。

媒介の知

私自身はこの科目のなかで裁判という観点からお話をさせていたこともありますが、ほかのところではミディエーションのトレーニングも行っています。ミディエーションにおいて、私は当事者の持つ力を信用して、当事者の対話を回復するために第三者の私たちが間に入るることによって対話を円滑にしようと試みます。実は科学技術と倫理については、対立する構造が複雑で、単純に科学技術者ないし科学者と市民とが対立する構造ばかりではなく、そこにはさまざまな人たちの利害が複雑に絡み合っています。しかしたとえ科学技術であっても、基本は紛争当事者二者と調停人というトライアングルであり、このトライアングルがかなりたくさん、いろんな形で形成されるのだと思います。つまり基本的には、対話の当事者の力を信じて、第三者である中

立的な者が対話を促進するという点においては、科学技術と社会の対話についても、ミディエーションと変わらないと思います。

実際のミディエーションになると、紛争をどんな形で解決するのかという時点になって、私たちのほうから「こうしたほうがいいんじゃないか」としばしば押し付けたりすることがあります。ところが、私たちは無力だよ、私たちは意見を言わないよ、あなたの方が対話して解決するんですよって言う、ある種の「無の力」を発揮すると、当事者のほうが自分たちがしつかり知恵を出さなければならないと思う。実際、当事者たちにとっては自分たちが明日から背負わなくてはならない日常生活の問題があります。一方私たち紛争の第三者はそういうわけではない。当事者たちは知恵を出さなければ明日から困るわけです。そうすると、彼らは僕たちがこの事案に関してこう解決したほうがいいと思うっているよりいい意見や、紛争の当事者の人たちと付き合うにはこんな方法があるという、非常に創造的な意見を出してくることに何度も出くわすわけです。それはまさに、彼らが生きている現場からの知恵ではないでしょうか。

コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)への期待

ミディエーションから見ると、どうやって対話の場が集まっていたかが非常に大きな課題です。例えば裁判では、紛争の当事者の一方が

インタビュー中の稲葉一氏。
CSCDにて。(2005年7月22日)



相手方に対して裁判所を通じて呼び出しをする、来なければあなたは不利益を受けますよ、と言われて無理やり裁判という対話の場に出ざるを得ない。しかし科学技術になると、出るも自由、出ないも自由、と言う人たちも社会にはたくさんいるわけです。そういう人たちを相手にした対話を考えて、常に対話の当事者が全員揃うことはないかもしれない。そうすると、対話とはつねに無力ではないかと思う。しかし他方で、ひとつひとつの対話でキレイな答えを出すことよりも、対話の場を継続して持つこと、それが大阪大学つていうようなある種のアカデミズムを背景にして、社会と直接の利害の無いところで場所を形成することの意味をCSCDで考えていただけたらと思います。例えば政府が作るコミュニケーションの場というのは、やはりバイアスがあったり、社会から信用をおいてもええ部分があったりすると思います。企業が持つコミュニケーションの場も然りです。大学は社会の様々なものから等価値・等距離で離れていて、しかもそういう場が常に開いていることが、社会に対するセーフガードの役割を果たすかもしれない。だから、どんな対話の場を作るにしても、一回で終りという対話の場よりは、継続して作られていますよつていうその情報の発信をCSCDでやっていただきたいと思います。その対話の場をCSCDが主体的につくるだけじゃなく、世間の人たちが「こういう対話をしたいんだけど、自分たちが対話の場を作るのは難しいから、このセンターで対話の場を構成してくれないか」つていうときに、まさにコーディネートされて、対話の場づくりをやっていただきたいなと思います。実際に私たちのNPOで紛争当事者の対話の場を作るんですけども、相手方の方々が一般的には来ていただけない場合が多いんですね。それは当然私たちの組織自身の信用性がないということだけではなくて、やっぱりバイアスがかかっている、「それは申立人のための場なんじゃないか」という、いつでも疑問を覚える。そういう中では、大阪大学という中立的な立場はある意味で全ての人が自由に乗り降りできるような対話の場として非

常にふさわしい場なのではないかと、大変期待をしています。

※1 通常、利害の対立する二者は向かい合つて話をするのが難しく、お互いのしりあつたりすることにもなりやすい。そこにミディエーターあるいは調停人として利害のからまない中立的な第三者が入ることによって、利害の対立する二人の対話を促進する役割をする。ミディエーションにもさまざまな流儀があり、権威をもった第三者が専門的な意見を言つて当事者を納得させる、裁判に近いものから、紛争の当事者がもともと持っている解決能力を促し、当事者どうしの対話を回復させることに主眼をおいたものまである。

※2 十四～十五年度文部科学省科学技術振興調整費「科学技術政策提言」部門を受け、科学技術、医療、看護、福祉などの社会的問題をめぐつて、利害や立場の異なる人々のあいだで対話的なコミュニケーションをいかに図るのかについて、大阪大学文学研究科臨床哲学研究室のメンバーを中心に関連する全国の研究者が集まつた研究プロジェクト。

※3 開催実績は以下のとおり。

第一回 対話シンポジウム「対話を促進する方策と、場の構築のための連携」

二〇〇三年二月十三日(日) 大阪大学豊中キャンパス

第二回 対話シンポジウム「臨床の現場での具体的な取り組みから、対話モデルを考える」

二〇〇四年一月十一日(日) 大阪大学吹田キャンパス

第三回 対話シンポジウム「被害者と加害者にとつての語ることと聞かれることの意味」

二〇〇四年十二月五日(日) 大阪大学中之島センター

※4 この科目は、大阪大学で博士号を取得しようとしている研究者たちが聴講し、それぞれの研究が現代社会の中でどのような意味を持つのか、研究者はどういう社会的責任意識を求められているのかを考えることを目的として、二〇〇二年より博士号取得予定者を対象とした全学特別プログラムとして開講された。現在は一般聴講者にも開放されている。その全学教育としての役割はコミュニケーションデザイン・センター(CSCD)のミッションとしても引き継がれる予定である。講師陣と講義タイトルは、6頁資料参照。



稲葉一人(いなば かずこ)

一九八三年より大阪地裁判事補、九五～九六年アメリカ連邦司法センター客員研究員を経て、九七年大阪地裁判事となる。その後二〇〇三年より現在まで三菱化学生命科学研究所(現科学技術文明研究所)研究員を務める。

科学技術と倫理 I／II

講師と講義タイトル

2005 年 1・2 学期 月曜 6 限 18:00-19:30 (大阪大学中之島センター 3 階 キャンパス・イノベーションセンター・セミナー室)

- 4 / 11 今日の課題としての科学技術と倫理
(稲葉一人: 科学技術文明研究所特別研究員、元判事／中岡成文: 大阪大学大学院文学研究科教授)
- 4 / 18 医療技術開発と人体実験の倫理 (土屋貴志: 大阪市立大学大学院文学研究科・助教授)
- 4 / 25 科学技術と裁判 (稲葉一人: 科学技術文明研究所・特別研究員)
- 5 / 9 ヒト遺伝子解析に伴う倫理的問題 (武部 啓: 近畿大学・特別研究員)
- 5 / 16 科学ジャーナリズム (林 衛: NPO 法人「サイエンス・コミュニケーション」理事)
- 5 / 23 サイエンス・ショップ (春日 匠: NPO 法人「サイエンス・コミュニケーション」事務局)
- 5 / 30 公共的対話のための哲学的方法論 (中岡成文: 大阪大学大学院文学研究科・教授)
- 6 / 6 生命倫理における医療資源の配分と正義 (児玉 聡: 東京大学大学院医学系研究科・助手)
- 6 / 13 医療研究における医薬品と倫理 (柳川忠二: 東邦大学薬学部・教授)
- 6 / 20 バイオテクノロジーの倫理 (蔵田伸雄: 北海道大学大学院文学研究科・助教授)
- 6 / 27 職業と倫理 (田中朋弘: 熊本大学文学部・助教授)
- 7 / 4 生命倫理認識における学者と市民の微妙な関係 (松本三和夫: 東京大学大学院人文社会学系研究科・教授)
- 7 / 11 科学者の不正行為 (山崎茂明: 愛知淑徳大学文学部・教授)
- 7 / 25 工学倫理 (岩崎豪人: 関西学院大学・非常勤講師)
- 10 / 3 生命科学と社会とのコミュニケーション (加藤和人: 京都大学人文科学研究所・生命科学研究所〈併任〉・助教授)
- 10 / 17 工学倫理の実践 (羽地 亮: 神戸大学文学部・助教授)
- 10 / 24 電子社会における情報セキュリティと倫理 (辻井重男: 情報セキュリティ大学院大学・学長)
- 10 / 31 医療研究における倫理的課題 (中山健夫: 京都大学大学院医学研究科・助教授)
- 11 / 14 リスク管理・予防原則・科学的リテラシー (松田裕之: 横浜国立大学環境情報研究院・教授)
- 11 / 21 科学社会学の変遷 (家高 洋: 大阪大学 COE 特任研究員)
- 11 / 28 遺伝医療における倫理 (高田史男: 北里大学大学院医学系研究科・助教授)
- 12 / 5 市場経済と倫理 (栗山浩一: 早稲田大学政治経済学部・助教授)
- 12 / 19 臨床試験の倫理問題 (齊尾千絵子: 科学技術文明研究所・コンサルティング部門)
- 1 / 16 先端医療技術に関する社会的意思決定の歴史 (林 真理: 工学院大学・助教授)
- 1 / 23 内部告発の倫理 (奥田太郎: 南山大学社会倫理研究所・第一種研究所員)
- 1 / 30 リスク・コミュニケーションにおけるマスメディア (吉川肇子: 慶應義塾大学商学部・助教授)
- 2 / 6 環境リスク・コミュニケーションをめぐる法・政策・価値 (高津融男: 奈良県立大学・講師)

今年4月、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）が発足した。「横断」と「臨床」を二つの柱とするインターフェイスの人文学の理念を「コミュニケーション」を中核とするCSCDはこれからどのように引き継いで発展させていくのか。センターで開かれた座談会での発言をもとに、センター長中岡教授には、インターフェイスの人文学とCSCDの関わりをまとめていただき、そして、CSCDに着任し、新たに本COEメンバーとなった池田教授、小林教授には、COEプログラムとCSCD双方にとっての課題について書いていただいた。

何を「横断」し、どう「臨床」するべきか

中岡 成文

大阪大学の21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」は非常に意欲的、冒険的な構想に貫かれている。「横断」と「臨床」がその二大キーワードであり、そのうち後者がコミュニケーションデザイン・センター（CSCD）設立につながったと大まかには言えるであろう。この点を確認しておくことが、COEプログラムを遂行していくうえでも、また当然CSCDの事業を遂行していくうえでも有益だと思われるので、COEプログラムが中間評価のために出した文書などをもとに、以下それを試みてみたい。

人文系の学問を新しい人文学の発想と知、すなわち具体的には「横断的な知」と「臨床的な知」の観点から再編制することが、COEでは提案されている。では、横断的な知、臨床的な知とは、それぞれ何を意味しているのだろうか。

「横断的な知」には、「異なる複数文化の接触・交差・軋轢を国家・地域横断的に捉える」ことが期待されており、3つのサブセクションに分かれる。第一に、シルクロードと世界史を中心とする「交錯する世界」のプロジェクト、第二に、日本のポップカルチャーや在日外国人による日本語のコミュニケーションの仕方などを扱い、文化と言語の両面に関する日本の混交状況を明らかにする「縫合される日本」のプロジェクト、そして第三に、活字印刷圏から映像圏へメディアが大きく変化しつつある現代において、従来の人文学が言語メディアを主として使ってきたのに対して、視聴覚メディアを研究・表現の核にする「映像人文学」を提唱する「越境する芸術・文化」のプロジェクトである。「越境する芸術・文化」のセクションではまた、「現実と社会を繋ぐインターフェイスとしてのデザイン」も取り上げられており、これはCOEメンバーでかつCSCD教員の藤田治彦さんを通してCSCDでも追求される課題であろう。



中岡成文（なかおか・なりふみ）

1950年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程退学（哲学）。福岡女子大学専任講師などを経て、現在大阪大学大学院文学研究科教授（臨床哲学）。主著に『臨床的理性批判』岩波書店、『ハーバースーコミュニケーション行為』講談社など。

さて、もうひとつが「臨床的な知」であり、「専門家と一般市民とを架橋する」ものと位置づけられているが、この「臨床的な知」を展開する新たな研究教育拠点（受け皿）となることが、CSCD 設立の意義の少なくとも一部である。COE ではたとえば次のことが目標として挙げられている。「多元化する社会のなかで、専門家と一般市民、マジョリティとマイノリティ、ジェンダー・世代間など、異なるコミュニケーション圏に属する集団がインタラクティブに理解しあい、議論する新たなコミュニケーションの形態を模索」する。あるいは、「裁判外紛争処理の方法論から哲学的討議の技法論、コンセンサス会議やサイエンス・ショップ（ゴミ処理や食の安全など市民生活のなかに発生している科学技術上の問題に、市民の要請に応じて大学がそのつどプロジェクトを組みつつ対応する仕組み）の構想など、現代社会が必要とする専門家と非専門家をつなぐ新しいコミュニケーションの形式がさまざまに模索され」るとも述べられている。こういった活動が CSCD に引き継がれ、実現されつつあることは明らかであろう。

反面、次のような疑問が浮かばないでもない。COE とはいうまでもなくセンター・オブ・エクセレンス、つまり世界拠点を意味する。当該分野で世界的水準にある研究拠点に対して競争的資金を投下する試みである。しかるに、「インターフェイスの人文科学」の構想からすると、何が世界的水準であるかという判断基準そのものに「横断」性と「臨床」性が適用されるべきなのだろう。従来のテリトリーを死守し、その枠内でのエクセレンスが競われるのではなく、知識生産とか知識の流通に於ける枠組みそれ自体が実践的に変更されるべきなのだろう。そのような枠組み変更や越境がはたして 21 世紀 COE プログラムというものの土俵上で可能かどうかという懸念がある。

しかし、「インターフェイスの人文科学」プログラムの「社会的な意義」として、「従来、古典研究の象徴的な存在として『象牙の塔』のなかに閉じこもりがちであった人文科学研究が、現代社会のさまざまな問題の中に深く身を浸すことになるとともに、大学外の多様な知の場所との緊密で開かれた双方向的なネットワークが形成されることになる」と述べられているだけに、この先鋭的な姿勢は妥協せずに貫きたいところだろう。少なくとも、COE プログラムのひとつの受け皿である CSCD はそれを正面から引き受けることになるう。

さらに、CSCD に視点を移してみるならば、「横断」と「臨床」という二つの軸、そして「インターフェイス」という基礎理念を人文科学の枠を越えて拡張し、文系の枠を越えた、あるいは文系をベースにした文理融合を目指すことがそのミッションになるだろう。そのさい、「インターフェイスの人文科学」が先鞭を一つつつあるアート・デザインなどの実践系人材をどのように活用するのかは、先決の問題である。たんに資料をきれいに作るのに役立てるといった技術的利用ではなく、コミュニケーション形式の再編成に結びつけていく取り組みはすでに始まっているはずである。

インターフェイスとメディアのデザイン

池田光穂 × 小林傳司

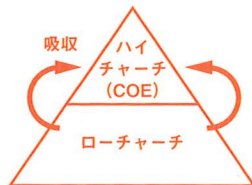
真理探究型と関係性探究型

時に国家や地域を越境・横断してその様相をとらえ、時にさまざまな問題の現場に足を運んで専門家と一般市民、マジョリティとマイノリティ、ジェンダーや世代など、異なる集団間の新たなコミュニケーションの形態を模索する「インターフェイスの人文学」。そもそもその理念と実践は、現場に寄り添った知の立ち上げという意味で関係性探究型であり、世界的研究拠点をめざすという真理探究型を極めたCOEプログラムの理念とはかなり位相を異にする。いわば、ローチャーチとハイチャーチの対比に近い。

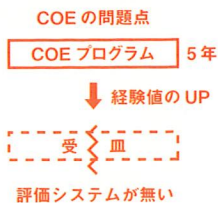
一見矛盾に満ちたふたつの研究軸だが、科学論、学問論の立場から社会のなかでの大学の位置づけを歴史的に振り返ると、人文学のみならずサイエンス、テクノロジーなどもかつては大学の外側にあって、ローチャーチ型の研究と見なされていた。それが社会との関係性のなかで徐々に「象牙の塔」は開かれ、技術的な知と結びついた研究分野も大学内部に取り込まれ、「正統な」座を占めるようになっていった。

そうした背景を視野にいれて「インターフェイスの人文学」プログラムの取り組みをとらえなおしてみると、「横断知」「臨床知」という関係性探究型のローチャーチ的な知の営みを、真理探究型中心のハイチャーチ的な学問軸のなかに導入しようとするもので、まさに歴史的な対立軸をあえて内部に取り込み、両方の特性を補完的に生かそうとしているのである。それは人文学研究のさらなる展開をこそざし、大学変革をも視野にいれた野心的・冒険的な取り組みだといえることができるだろう。

この試みの成果を、5年というCOEの年限のなかで性急に求めるのは無理がある。そこで試みの一部である「臨床知」の取り組みの受け皿としてCSCDが開設され、継続してコミュニケーション・ネットワークの構築に取り組んでいくことになったのである。こうした長期的視野に立った研究拠点形成の取り組みの



「インターフェイスの人文学」の本来のねらい



なかからこそ、その成果はあらわれ、新しいタイプの学問が生まれる可能性をもっているといえるだろう。

若手研究者の問題

COEプログラムは一時的に大勢の若手研究者の雇用を生み出したが、いずれも5年までの任期制で、その能力にかかわらず、その後の雇用のシステムがない。しかも「インターフェイスの人文学」のようなローチャーチ的側面を含む研究の場合、プロジェクト自体のやりがいの大きさに比して、その業績を正当に評価するシステムがまだ確立されていないのが現状だ。従来の論文を中心とした業績評価のシステムをはみでる取り組みは、キャリアメイキングにおいては非常不利になる。

こうした体制は、とくに研究職をめざす若手研究者にとっては厳しいものである。しかし視点をかえて人材採用の側に立つと、研究室のなかにこもっているだけの古典的な研究姿勢では、変化の激しい現代社会のニーズには応えてゆけない。研究者の資質として、今後ますます横断性・臨床性が要求されることになるだろう。もはやペーパー上の業績だけでは研究職に就くことが難しいこうした現状からすると、横断性と臨床性を兼ね備えた人材の養成という意味において、COEの試みに参加することは若手研究者にとってもけって無駄ではなく、逆に不可欠である。

インターフェイス学の構築を

「インターフェイスの人文学」がめざしたものは、大学と社会の間のコミュニケーション・インターフェイスであるとともに、巨大化した大学内、たこつぼ化しがちな研究者間のインターフェイスであった。それはまた、文系・理系の枠を越えて、文理融合をめざしたものであった。実際、今回のCOEプログラムによって各種のイベントがふえ、文理にかかわらず大学内外での交流は活発化している。こうした交流もまた一朝一夕に評価できるものではないが、横断型研究の芽として、将来そのネットワークが生かされることになるだろう。

臨床的なインターフェイスの局面においては、一般市民の代弁者になって活動したり、あるいは専門家のスポークスマンになったり、どちらか一方にコミットするのではなく、第3の立場に立って双方と等しく距離をもってかかわることのできる能力が必要とされる。それこそが本COEプログラムが意図するインターフェイス

ス学であり、それを具体的に実践し、そして普遍化するシステムを大学のなかに構築してゆくことが、今後 CSCD に課せられた任務である。

情報発信とメディアとデザイン

本 COE プログラムにおいては、ニュースレターを含め、これまで各研究班が数多くの報告書を出版してきた。しかしこれらは市販されておらず、配布先は政府や大学、関連機関宛にとどまっている。インターフェイスをかけた関係性探索型の研究であるにもかかわらず、多分に矛盾をはらんだ情報発信となっている。

そうしたなかで CSCD が構想するコミュニケーションデザインは、ターゲットと戦略をもった取り組みとして期待される。たとえば「高大連携」「社学連携」がうたわれる昨今、受験生集めや就職活動といった目先の方法戦略ではなく、ポリシーや主張を伝え、現場へのフィードバック機構を備えた情報発信媒体が必要とされている。

その際、メディアやデザインの研究の重要性がさらに高まるが、COE プログラムにおいては依然として技術的サポート、媒介物としての位置づけを脱しきれていない。それは従来、アートに対してデザインがローチャーチ型に位置づけられてきたため、その発想を逆転させ、メディアとデザインを研究体制の中心に据えようとする CSCD の試みのなかにこそ、臨床知の新しいモデル形成の可能性が秘められているといえよう。

矛盾をはらんだ情報発信

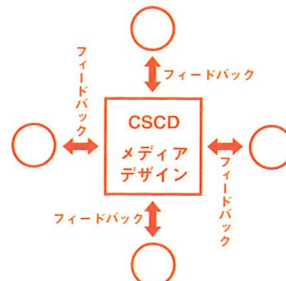
COE プログラム

一方向のみの
広報



関係性を探索していない！

CSCD が構想するコミュニケーションデザイン



ターゲットと戦略をもった取り組み

池田光穂 (いけだ・みつほ)

水俣病公式認定 (1956 年 5 月) の翌月に大阪市北区通信病院で生まれる。冷戦と高度経済成長の中で人工甘味料・保存料の食生活を送り、ベトナム反戦と大阪万博の中で厭戦と科学技術信仰の思想を浴びる。大阪、鹿児島、中央アメリカ、北海道、熊本と遍歴を続けるうちに、万博跡地のコミュニケーションデザイン・センターに漂着する。大阪大学大学院医学研究科単位修得退学。医療人類学専攻。著書『実践の医療人類学』(世界思想社) など。



小林傳司 (こばやし・ただし)

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授。1954 年生まれ。83 年、東大大学院理学系研究科博士課程修了。90 年南山大助教授、99 年教授。05 年より現職。専門は科学哲学、科学技術論。社会における科学技術のあり方について、人文科学的観点からの研究に取り組む。01 年、科学技術社会論学会の設立にかかわる。著書に『公共のための科学技術』(編著) 王川大学出版会、『誰が科学技術について考えるのか』名古屋大学出版会、『科学論の現在』(共著) 勁草書房など。

